

わ

が国に膨大なインフラがあることは周知の事実であり、維持管理の重要性は、業界内では、少なくとも十年以上前から認識されていたと思う。ただし、それを切迫感のある問題として意識し、本気で策を講じてきたかと言えば、昨今の状況を見る限りは十分ではなかった。振り返れば、一九八四年に報道されたコンクリートクライシス、一九九九年の山陽新幹線の崩落事故等を契機として、事故直後は検討が進められたが、頭の何処かで、まだ大丈夫、ビジネスとして成立しない、等の気持ちがあったのかもしれない。自身も維持管理の研究は面白いが、その面白さを授業で説明することは難しいと思っていた。土木を志す学生が求めるのは、ビッグプロジェクトに携わりたい！という雰囲気を感じていたからかもしれない。

維持管理は、極めてクリエイティブで知的な領域である。前の世代が整備した施設を、ダイナミックに変化する自然環境の下、次世代に引き渡すために、知識・知恵・技術等を総動員して、対応する行為である。過去から現在までの設計・施工・維持管理技術を理解しておくことが最低限必要となる。インフラは単品生産であること、施設ごとに環境条件が異なることを考えれば、知識があるだけでは不十分で、対象施設の状況を深く理解し、様々な可能性を考え、適切な対応を選択する必要がある。昨今、維持管理マニュアルの整備が盛んに行われている。

各 人 各 説

維持管理に本気で取り組む

東京理科大学理工学部土木工学科 准教授

加藤佳孝

Yoshitaka Kato



それ自体は否定しないが、マニュアルの整備は、あくまでも汎用的な知識を体系化しているに過ぎず、それによって、インフラを適切に維持管理できるわけではない。

重要なことは、個々のインフラにマッチした維持管理の方法を、自らの頭で考えることである。維持管理に関する技術（計測、補修・補強等）は、今後も盛んに開発が進むと思われる。数ある技術の長所短所を理解し、目的に合致した技術を選択することは、極めて高度な技術力が必要となる。そのため、開発者には、技術の特徴（特に短所）についての情報提供が求められる。加えて、業界内で技術の評価結果を公表する枠組みがあると良い。例えば、商品購入時に、最近ではクチコミを参考にすることが多いと思う。そのとき、どんなクチコミが書かれていると信じるであろうか？ 私見ではあるが、良い評判のみの商品は（実は本当に良いのかもしれないが）信用できず、特に短所が記載されていると、その短所を自分なら許容できるか否かに基づいて判断していることが多い。一般の商品は、消費者が自由に評価できるが、専門的な技術の評価は、業界内で評価するしかない。だからこそ、普通以上に厳しい目で評価しない限り、その結果がもたらす効果を一般の方に受け入れてもらうことはできない。非常に厳しい事ではあるが、そのような努力が、今の建設業界には求められているのではないだろうか。